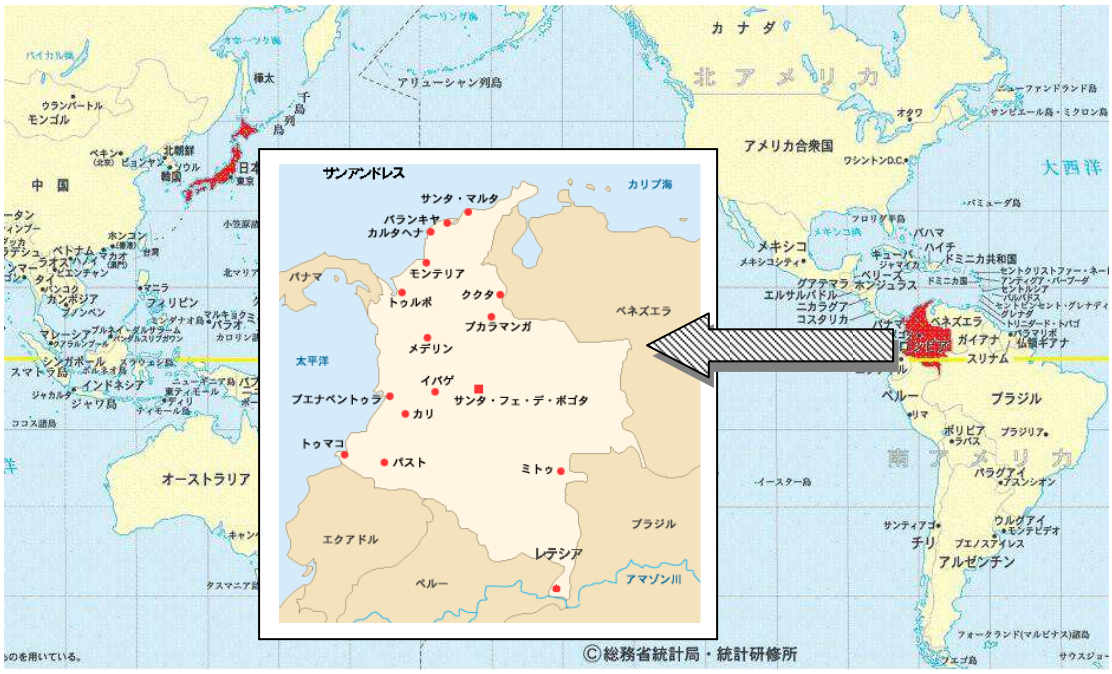
コロンビア・ボゴタ日本人学校の３年間

前　在コロンビア日本国大使館附属日本人学校
校長　川口　主紀　（現　白糠町立庶路小学校）

１　コロンビア、首都ボゴタの概要



(1)　日本からのアクセス

アトランタ、ヒューストン等アメリカの空港を中継して約 20 時間でボゴタ・エルドラド空港に到着する。空港からタクシーで、観光名所の旧市街地（セントロ）までは 30 分ほどで、日本人が多く住む新市街地（ノルテ）までは 40 分ほどかかる。

(2)　コロンビア基礎情報

①　**人種**　白人、メスチソ、黒人、先住民などで、世界で一番混血が進んでいると言われている。

②　**人口**　約４５００万人

③　**言語**　スペイン語、各先住民（インディヘナ）の言語で、ボゴタ市内でも英語はあまり通用しなかった。観光地では英語が使えるが、発音にスペイン語なまりがあると聞き取りにくい。

④　**宗教**　９０％以上がカトリック教徒であるが、少数のイスラム教徒、ヒンズー教徒、仏教徒もいる。私の友人は創価学会の信者であった。

⑤　**気候**　首都ボゴタは 2650m の高地にあるため、年間平均気温 15°Ｃほどの冷涼な気候である。ここから下に下がっていくほど暑くなり、太平洋、カリブ海、アマゾン川付近は熱帯雨林気候となる。ボゴタでは雨期と乾期が３～４ヶ月周期で訪れていたが、現在は異常気象のせいか規則性がない。2009 年は晴れ

続きで水不足になった。2010 年は雨ばかりで国内大洪水に見舞われた。2011 年は晴れ、雨半分であった。また、雪は降らないが、雷雨のあとゴルフボール様の雹が大量に降ることが年に 2～3 回あった。

⑥　**通貨**　コロンビア・ペソ（ＣＰ）　１円が約２０ＣＰで、例えば夕食代が 10 万ペソ（約 5 千円）のように通常支払うＣＰの桁が大きいため、最初は慣れなかった。逆に帰国してから、日本円での支払いに戸惑う。

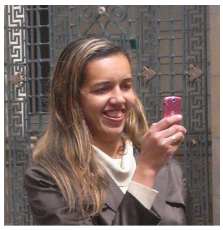
⑦　**政治**　一貫して親米路線であり、大統領制、資本主義の国である。過去、スペインより、エクアドル、ベネズエラ、パナマを含め大コロンビアとして独立したが、紆余曲折を経て現在のコロンビア共和国となる。

⑧　**経済**　日本との関わりで言うと、コーヒー、切り花が日本に輸出され、昨年は伊藤忠商事が大規模炭鉱の採掘権を取得した。また 2012 年９月にはＥＰＡ交渉を開始した。日本国内の農産物と競合するものが極めて少ないためである。生活していて、日本の電気製品、自動車等のシェアは中国、韓国に押されて売り場面積がどんどん縮小されていったことを思うと今後に期待する。
その他、石油、ウラン等地下資源も豊富である。

⑨　**治安**　コロンビアというと麻薬、ゲリラによる内戦のイメージが強く、赴任前は緊張していた。しかし、前ウリベ政権より、アメリカの協力による麻薬組織撲滅、ゲリラ封じ込め作戦が功を奏し、ボゴタでの生活に危険や不安を感じたことはなかった。ゲリラはカノ司令官、モノホホイ軍事担当が政府軍に殺害され弱体化し、エクアドル、ベネズエラ国境周辺に追い詰められている。麻薬組織も相次いでボスが逮捕され、今やアメリカへの麻薬密輸はメキシコに取って代わられた形になっている。しかし、年に数回爆弾テロがあり、激減したとは言え身代金目当ての誘拐、人口比日本の 10 倍ほどの殺人事件が起きている。

⑩　**対日感情、気質**　親日的である。日本人に対しては他のアジア人と一段違う親しみ、あこがれ、尊敬の気持ちを持っている。これはカリ市やバランキージャ市に移住した日本人が誠実に地元の人達と助け合って暮らし、政府から何度も表彰を受けるほどコロンビア農業を振興してきてきたこと、そして、先進工業国として勝ち得た国際的な評価が大きいだろう。

【JETRO コロンビア事務所が調べた日系企業のコロンビア人の印象】



コロンビア人とは：
○真面目（規則を守る、一面頑固）
○几帳面（目標達成度が高い、約束を守る）
○洗練されたデザイン感覚に富む
○日本人との相性が良い（新規性へ対応能力が高い、飲み込み早い、手先が器用）
○大家族単位での行動（絆が強く、残業・休日出勤より　家族との時間を優先）
○愛想が良い（商売上手）

このように、日本で考える南米の「ラテン気質」とは全く違う印象であった。

(3)　首都ボゴタ基礎情報

首都ボゴタの人口は約700万人で、白人が多い。町はスールー（南）、セントロ（旧市街）、ノルテ（新市街）の大きく分かれ、スールーは製造業、農業がさかんで、投降ゲリラ兵士等も住む。エストラート１～３である。セントロは、古い移民当初の面影を残す佇まいで観光客も多い一方犯罪も多い。ノルテは比較的富裕な人達が住む場所であり治安も良い。

日本人が住む家は、拳銃携行の複数守衛が玄関を守る集合高層住宅が一般的であり、セキュリティーが高い。また公共の建物に入るときは、身分証明書提示、指紋登録、照合、空港でのチェックと同様の手続きを踏むなど、テロ対策が徹底されている。

(4)　生活

ボゴタの町を歩くと、衣服は、春・秋服、冬服と思い思いの服装である。寒暖の差が一日の中でも激しいためである。

食事は、一般的にコロンビア人は、朝、昼たくさん食べ、夜は果物程度のみが普通である。右の写真は「アヒ・ヤコ」という伝統的な料理で、溶けた芋をベースに鶏肉等で出汁を取り、ゆでたとうもろこしを添えたスープ様のものである。アヒはよく使われる香辛料で、極めて辛いが、肉、魚、なんでも良く合う。また、右下は、「アサード」と言われる焼き肉料理である。肉の他にジャガイモやとうもろこしが添えられる。豪華になると、牛肉、鶏肉、豚肉が一緒に盛られる。肉食が主のボゴタにあっても日本食材は高額、冷凍ではあるが手に入る。チリ産の生のサーモンが安く手に入るのでよく食した。ある時、家内が活きの良いカレイを見つけてきて、室内で一夜干しにした。翌朝、管理人から「人の迷惑になる臭いは出さないで下さい」とレターがきた。あまり魚を食さないボゴタの人々には、一夜干しの魚の臭いは生臭く不快だったに違いない。

また、ボゴタに派遣される教員は、治安の悪さから警護員（エスコルタ）を雇わなければならない。教員はこの警護員から地元の様々な情報をもらうことになる。

２　ボゴタ日本人学校の概要

(1)　名称

・在コロンビア日本国大使館附属日本人学校（正式名称）

・ボゴタ日本人学校（通称）
・Asociacion Cultural Japonesa（現地登録名称　日本文化協会）

日本国文科省より認可は受けた学校ではあるが、コロンビア国内では学校ではなく、日本文化を子どもたちに教え、コロンビアとの交流を図ることを目的とした機関であり、日本文化の一環として教科授業を行っているとの立場である。

コロンビア政府から学校としての認可を受けると、コロンビア教育省の指導要領に従って教育課程を編成しなければならない。

(2)　財源

日本国政府補助　４割、保護者負担３割、協賛企業寄附３割　の比率で年間５億ＣＰ（約 2500 万円）の予算で運営している。保護者の負担は月謝・バス利用料は 4～5 万円、その他入学料、年会費、ＰＴＡ会費などである。

(3)　教育課程

日本の指導要領に基づき編成されるが、地元講師による英会話、スペイン語会話、また日本語が話せないことのための日本語指導の時間が特設されている。

(4)　児童・生徒

平成 23 年度は、東日本大震災からの避難者も含め 22 名でスタートした。地元に永住する家庭の児童生徒 5 名、帰国する家庭の児童生徒 17 名、小１から中３まで 9 学級であった。子どもたちはみな素直で明るく、校内はいつも和やかで一体感のある校風である。2～3 年で帰国する子どもたちが多い中、中学部卒業まで在籍する永住家庭の子どもが、児童生徒会活動、対外行事などの中心となる。毎年帰国者を見送るのみの寂しさと自分にかかる責任の重さが常に彼らの心の中にある。

そんなこともあってか、最近は中学部卒業を待たず、地元の有名私立学校に転入する子どもが増えている。彼らは転入してから 1～2 年はスペイン語、英語、そして膨大なレポート等の宿題で苦労する。また、地元私立学校の学習内容は、日本の教育課程より 1～2 年進んでいるところがあったり、数学と科学が一緒になった「総合学科」のようなものがあったりと慣れるまで大変である。

しかし、過去、彼らは代々生徒会やボランティアサークル等のリーダーになっていった。これは、日本人の気質や特別活動などの領域で育てられる資質が地元の教育と比べ勝っているからではないかと私は思っている。

(5)　保護者

保護者の間には、帰国する家庭、永住する家庭で２つの教育要求がある。帰国する家庭は勿論、帰国後日本の学校へ有利に進学・転入できる学力向上である。永住する家庭は日本人としてのアイデンティティの確立や日本語の取得と合わせ、地元の学校へ進学・転入できるスペイン語、英語力さらに発表力、現地理解教育を求めている。

日本人学校はこの２つの教育要求の間で、バランスを取りながら教育計画を作っていくこととなる。

３　ボゴタ日本人学校の校長の役割と教育

(1)　校長の役割

①「大使館附属日本人学校」の名の通り大使館（外務省）とのつながりが強い。

【大使公邸での送別会】

2009 年新型インフルエンザがボゴタで発生したとき大使館付医務官との打ち合わせに基づき、予防的臨時休業の措置をとろうとしたところ、直接、特命全権大使より電話が入り、「ウリベ大統領が、インフルエンザが流行しても公立学校を絶対休みにしないと宣言した。スペイン人学校なども休みにしない以上、日本国を代表する日本人学校が真っ先に休校することはできない。」とのことで、通常授業となった。

結果として児童生徒、職員、在留邦人に感染者は出ず、休校の必要はなかった。

学校には国家警察が 2 名常駐し警護に当たってくれている。これも大使館からの要請に基づくものである。修学旅行は 6 名の武装警官に守られる形で行い、日本国政府主催中南米校長会ボゴタ研修会の折の警護は国賓並であった。国の各種補助金申請などのアドバイスも含め大使館との関係は日本人学校の要である。週に一度、校長が大使館へ出向き、担当者と打ち合わせていたが、実務中心なので、2010 年より教頭の仕事とし、校長は大使と直接話すことがある場合にだけ出向くことにした。大使が日本人学校の教育に望むことは極めて理論的、具体的なものであった。

また、各種大使公邸でのパーティ等の催し物には必ず招待され出席する。邦人社会の催し物では、大使夫妻、ボゴタ企業会会長夫妻、JICA 所長夫妻と同じテーブルになる。最初は緊張したものである。

②「木曜会（ボゴタ企業会)」、理事会（学校運営委員会）の下で

木曜会は月の最終木曜日に開かれる。大使、大使館担当職員をはじめ日系企業のトップが出席する。大使、会長の挨拶に始まり、日本コロンビア商工会、安全などを担当する委員会からの報告、大使館担当から政治、経済、治安状況について説明と質疑応答がある。校長はこの会議に出席し、最後に学校活動報告をしなければならない。企業の方にわかりやすいようより具体的に、数値も交えて成果の報告ができるよう心がけた。2012 年 9 月 EPA 交渉開始新聞記事に、コロンビアと日本は農作物で競合するものがないとの記載があったが、これはさかんに木曜会の席上で企業が大使館に述べていたことである。治安の改善を受け参加企業は 2009 年 24 社から 2011 年 34 社にまで増えた。今後益々増えていくだろう。

一方、理事会は学校運営のために木曜会から選ばれた理事からなる。毎月木曜会の前の日に行われるのが通常である。ここでは、教育・行事計画、予算執行状況、現地従業員の雇用問題等様々な経営課題が論議され、方針が決定される。私は前回派遣時に学校会計担当だった知識を活かし、赤字だった学校財政の改善策を立て 1 年で黒字に変え、さらに理事会の支持の下、現地採用教員の増員を実現した。

⑵　特色ある教育活動

①コロンビア学習（総合的な学習の時間）

おそらくどこの日本人学校でも行われていると思われるが,ボゴタ日本人学校の特徴は、子どもたちの研究内容の質の高さと堂々たる発表力にある。発表会には保護者は勿論、大使はじめ JICA 所長、木曜会の方々も臨席する。子どもたちの発表は参会者も驚く高度な内容が含まれる。私が印象に残っているテーマは「前ウリベ政権と現サントス政権との政策研究」、「コロンビアの観光産業を振興させる具体的方策」、「コロンビアの水は飲めないか？～科学実験に基づく考察」、「コロンビアの舗装道路はなぜもろいのか～日本アスファルト協会の協力による構造と経費の一考察」、「コロンビアと日本、どちらが危険か～犯罪発生状況と原因の考察から」等であった。飲めないとされるコロンビアの水道水は、実験の結果、日本の水道水と変わらない、一工程抜いて安価に道路建設し修理を繰り返すことは、高くても一工程を抜かない工法で行う経費と比べ、５年で高上がりにつく、コロンビアの犯罪は因果関係が明らかであり普通の人が凶悪犯罪に巻き込まれることは少ないし自殺者も極めて少ない、しかし日本では行きずりの殺人、自殺者 3 万人、コロンビア人には信じられない状況がある、これで日本は安全と言えるのか等、目から鱗の発表、テーゼであった。これらの講評は、大使が行うのが恒例となっていた。

②外交団バザーのオープニング和太鼓演奏

30 カ国ほどの大使館、国連事務所が年に一度盛大にバザーを行う。事務局は各国が持ち回り、通常事務局の大使夫人が長となる。日本人学校は長年、このオープニング演奏を担当し、5 曲ほどが代々受け継がれている。2011 年は東日本大震災にコロンビアから多額の義援金が贈られたことへの感謝を込めて、児童生徒代表がスペイン語で挨拶をした。

③日本とコロンビアの伝統行事の実施

七夕、ハロウィン、クリスマス、節分等、伝統行事を実施している。実施にあたっては、必ず子どもたちによる行事の由来解説がパワーポイント、紙芝居、寸劇の手法で解説される。由来の他、そこにある人々の願いが伝わる工夫がされている。

④英語、スペイン語のニーズ別授業

永住する家庭の子は、日本人学校で小３くらいまでに日本語の基礎をマスターし、国語の授業にも着いてこられるようになる。しかし、彼らは卒業後、地元の私立学校に入った段階でスペイン語、英語の理解ができなくなってしまう。そこで小学校高学年から保護者と相談の上で、習熟度別＋ニーズ別のコース分けをし、厳しく指導することにした。また、5 人いる現地英語・スペイン語講師にはこの趣旨に則った指導をさせることにした。

まだまだ書き足りないことがたくさんあるが、最後に、国間際の 2012 年 1 月に職員会議で示した 3 年間の総括と今後の課題を資料として載せ、私の帰国報告とする。